億単位の男

半村良

Ryo Hanmura

集英社

億単位の男

半村良

Ryo Hanmura

集英社

億単位の男

一九九六年 五 月三〇日 第一刷発行

著 者 半村良

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号 一〇一―五〇
電話 編集部 (〇三) 三二三〇―六一〇〇
販売部 (〇三) 三二三〇―六三九三
制作部 (〇三) 三二三〇―六〇八〇

印刷所 廣済堂印刷株式会社
製本所 ナショナル製本協同組合
検印廃止
乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1996 HANMURA RYO, Printed in Japan
ISBN4-08-774196-6 C0093

億単位の男——目　次

三十年目の水　7
映画と造船　19
思考と実行　31
戦火と繁栄　42
製塩と空港　53
温泉と戦争　64
戦犯と造船　76
作家と大木　87
造船と観光　98

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

船員と乗客　109
漁業と造船　121
饅頭と弾薬　132
勲章と弾薬　172
非情と温情　182
日々に遠のく　193
億単位の儲け　202
形と大きさ　214
総仕上げ　226

装画　唐仁原教久
題字　鴨下芳文
装丁　安田信一（スタジオ・ギブ）

億単位の男

三十年目の水

一

平成六年九月四日。四国松山市でひとつのパーティが開かれていた。

時に道後地方は未曾有の渇水状態。春から無降雨の日が続き、九月には松山市の水瓶である石手川ダムの水も底をついて、干上がり乾いた湖底の土が露出している光景が、連日全国ネットのテレビで放映されたから、ダムを一望できる地点には、県の内外から見物の車が集まって、屋台のタコ焼屋まで現れる始末だった。

そのパーティの開始は午後七時。場所はJR松山駅の北東に位置する愛媛県県民文化会館。坊っちゃん電車の呼び名で知られる路面電車が終点の道後温泉へ向かう左側である。

「坪内寿夫氏の八十歳を祝う会」

会場の入口にはそう記した飾り付けが掲げてある。厳しい給水制限で、飲食店はみな午後九時をすぎると店仕舞いにかかっている。店で使用する水の問題だけでなく、客は早く帰らないと入浴しそこ

なってしまうからだ。

坪内寿夫の八十回目の誕生祝いは発起人のひとり、地元選出の国会議員の挨拶ではじまった。

「こんな水の足らんときに、大げさな誕生祝いなどせんとけばええのに」

そんな声もしないではなかったが、来賓の祝辞がはじまると、そういう声はまったく消えてしまった。

来賓挨拶の最後に壇上へ立った気鋭の政治家が、いま松山市が悩む水の問題にさりげなく触れたからだ。

知事が祝辞を寄せ、市長が挨拶に立ち、国会議員がそれに続くという式次第は、どこの地方都市にも見られる、一般的な地元有力者の祝賀パーティだったが、そのさりげないひとことが、出席者の中にひそかな動揺を巻き起こしたのだ。

もの堅い地方都市の人々であるから、不躾（ぶしつけ）な大声こそあがらなかったが、正面演壇から遠い席についていた人々ほど、動揺は大きかった。

なぜならそれは長い間地元ではタブー視されていたことに触れたからだった。

「坪内氏は国鉄の再建、瀬戸内海の塩田の問題、また今日問題になっている愛媛県の水の問題についても、多大なご尽力をいただいております」

それはこうした席で当然語られる賛辞には違いない。

しかし松山市のこの日のパーティでは、祝賀を受ける坪内寿夫という人物にまつわるひとつの秘密が、真相を明らかにしてよいことになった瞬間であったのだ。

一人の国会議員がさりげなくその問題に触れたのは、秘密にしておかなければならない環境が、過去のものになっていたからだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

市の水瓶である石手川ダムはすでに底を干上がらせて、若者たちが乾いたダムの底にテントを張って、この未曾有の水飢饉を記憶するべくキャンプをしている状態だった。

そのとき、坪内の水は道後平野を見下ろす繁多寺の境内南側の巨大な貯水槽で、ゴボゴボと音をあげ、飛沫をあげていたのだ。

坪内寿夫という人物は、伊予に生まれた大男で、早くから中央にも名を知られていた人物であるが、発想や行動の仕方が常人ばなれをしており、そのため人々は理解に苦しみ、それぞれの知性や人格の枠内で、怪物とか銭儲けの達人とか、のちには再建王などというレッテルを貼って理解するしかなかったのだ。

しかし松山市に水を引くことに尽力してから三十年後に、はじめてその水が市民の生活を潤すことになり、なおかつ長い年月、口を閉ざし続けたことは、彼の人間性をよく物語る事実であろう。

八十歳の誕生日を祝う宴の席で、三十年にわたるタブーが解けたことは、晩年の彼に過去のさまざまな出来事を語る自由が与えられたとすることも出来る。

謎多い男として恐れられ、愚かな巨人として利用され続けた反面、徹底して慕いよる人々も多かった彼の人生は、その謎を解く過程で次の時代に生きる人々に、人生の糧となるに違いない。

二

愛媛県には石鎚国定公園がある。石鎚山は西日本の最高峰でそれに連なる面河山を水源とする清流が面河川となっていったんは西に流れるが、やがて向きを南に変え、県境を越えて仁淀川に合流し、高知市と土佐市の間で土佐湾へ流れ込んでいる。

法律では、河川の水利権は河口の自治体の所有であることになっている。
その理由は洪水があった場合、河口側が被害をこうむるという、歴史的な知恵からである。
愛媛県は面河川の水を欲していたので、高知県に再三かけあったが、高知県側も貴重な水資源のことゆえ、交渉はいっこうに進まなかった。
このとき道前、道後で活躍していたのが、気鋭の実業家坪内寿夫だった。
当時の愛媛県知事は行き詰まったその問題の打開策を、四国銀行の頭取に打診した。
昭和三十年代前半のことである。
頭取は高知県の知事と親交のある坪内に交渉させればよかろうと提案し、その件に関しては四国銀行も後押ししようと約束した。
こうして銀行と坪内の連携による交渉が再開されたのだ。
すると高知県側では坪内の事業に対して食指を動かした。活発に活動する事業所が少なかったのだ。坪内の本拠を高知県に移せないかというのだ。
これで交渉の手触りは柔らかくなり、人間関係も深まって、事業所を移す話は抜きにして、水が愛媛県側にも分けられることになったのだ。
面河川の水を引いたのが高知県側にある面河ダムではなく面河川から坪内が松山市内へ引いた貯水池で、繁多寺横にある、俗称・面河ダムである。
しかし高知県と愛媛県が取り交わした約束は、生活用水と灌漑用水に限るというものだった。
ところが時代は日本が急速に工業化へ進み、各地方で工場誘致が競争で行われはじめた。
愛媛県は知事が交替して次の知事の時代へ入った。
新知事は前知事の業績を活用して、工場誘致へ動き、面河ダムの水を工業用水に使ってしまった。

工場に対する給水を保証して誘致に成功したのだ。
だがこれが高知県議会の憤激を買うことになる。同じ水の問題で、香川県が徳島県から水をもらう交渉が、建設省を仲介にして成立した直後だったのだ。
香川県側は水の謝礼として、推定五千万円を支払ったのに、愛媛県は契約書に金一封という文言しかなかったのを盾に、三百万円を包んだだけだったのだ。
なお悪いことに愛媛県の知事は、
「これでも誠意のあるほうよ」
と、口を滑らせてしまったのだ。
それで愛媛県に対する高知県の分水は中止されることになってしまった。
坪内はすでに自分の役目はおわったと思っていたが、当時の北条市の市長に説得されて、再び高知県との関係修復に動いたのだ。
今度はこじらせたものだから、その関係修復は少しくらいの人間関係では進みはしなかった。
特別な手を打たないと関係は修復できないと悟った坪内は、なんと高知県知事に対して、個人として選挙資金を生涯提供し続けると約束したのだ。
交渉に立会った銀行家もその約束を保証したとはいえ、生涯選挙資金を出すという坪内の約束も度はずれているが、それを信じた相手も人並みな人物ではない。相手の度量を見抜く目があったのだろう。
この交渉があって、帝人はじめいくつかの工場を、愛媛県は誘致することに成功したのだが、問題はその後の坪内である。
選挙資金の提供は大きな贈収賄である。表面化すれば高知県の知事は政治生命を失うことになるの

だ。

これが面河ダムの水に関するタブーのあらましだ。

その高知県知事は坪内が生涯秘密にするという約束のもとに、知事を二十年間つとめ、先年病没した。

その間に、秘事は周辺からじわじわと漏れだしてはいたが、坪内は遂に口を開くことなく八十歳の誕生日を迎えたのである。

約束を実行し続けた坪内は、抗争のあった両県知事が亡くなったあとも健在で、その誕生祝いに参列した国会議員らの口から、三十年ぶりに真相が語られたのである。

こういう事業家がほかにあっただろうか。果たして坪内寿夫という人物の本質は、事業家だったのだろうか。

そのパーティはレコード会社が贈った新曲と、それを歌う歌手たちの登場で一層盛大になったが、実は来賓たちが帰ったあと、坪内夫妻二人だけが椅子について、贈られた新曲をしんみりと聞いていた。ここに坪内寿夫という男の本質があったようだ。

三

彼は松山市の隣、松前（まさき）町で大正三年（一九一四年）に生まれている。

実家は劇場を経営していた。旅芝居の一座を迎えたり、浪曲師たちが興行したり、素朴な大衆演芸がくりひろげられる庶民慰安の場だった。

松前という土地は瀬戸内海の伊予灘（いよなだ）に面しており、各種の小魚を乾燥させて酒の肴にもてはやされ

た、あの辻占入りの吹き寄せの産地である。
不安定な小舟を操り、小魚を獲る漁師町は、貧しい土地柄であったはずだ。
八十回目の誕生日に、自分の人生を語る歌に耳を傾けていた坪内寿夫の姿は、浪曲に耳を傾ける幼い姿に重なるようだ。
勧善懲悪を主題とした浪曲の世界で、彼はその後の人生に重要なものを学びとっていたのかも知れない。
彼はこう述懐している。
「わしの家は、海と劇場の間を行ったり来たりしとったような気がする」
その言葉通り、彼が海運と娯楽の間で活動を続けたことはたしかなようだ。
ある人は言う。
「坪内寿夫は途方もないエンターテイナーかも知れない」
と。
人を喜ばすことが好きらしいが、自身が娯楽の世界に身を投じて、芸能界へ入るにしては、いささか体軀も精神も巨大すぎた。
彼は昭和九年三月に弓削商船学校を卒業し、翌月南満州鉄道に入社している。結婚は昭和十五年で、終戦間際の昭和二十年三月に召集され、すぐ捕虜としてシベリアへ送られた。
「シベリアには三年おった。収容所でソビエトの兵隊が、得意を書けというから、洗濯屋の経験があると書いて出した。寒空の下で作業せんとすむよう知恵を使ったんじゃ。みんなシラミをわかせて発疹チブスじゃ。シラミ殺さないかんから、捕虜の服を釜で煮るんじゃ。そのために石鹸をくれるんじゃ。石鹸ちいと使うて、残りをパンと交換する。ろくに食わせてもらえんかったから、寒いところで

作業しとった者、腹すかしてばたばた死による。最初の一年は洗濯屋で死ぬのをまぬがれた。じゃが一年たつと本物の洗濯屋が現れよった。じゃから寒空の下で重労働よ。発疹チブスで死ぬ、栄養失調で死ぬる。挨拶は今日何人死んだかよ。零下五十度。金属に触れれば手がひっついてしまう。なにしろスズメが凍って落ちるんじゃからのう。それを走って獲って来て、焼いて食うんじゃ。ロシア人はスズメ食わんからびっくりしよる。ロシア人はゴボウも食わんじゃったのう。ゴボウがいっぱい生えとって、だれもゴボウ掘らんから大きなっとる。ゴボウがうまかった。スズメが凍って落ちるとか、ゴボウがうまいとか、今の若い者に聞かせたら、よう信じんわなあ。シベリアでスターリンの噂聞いて、偉い人物だとは思わなんだ。奥さん離縁して、女優さんと再婚して宮殿に住んどる。何が共産主義じゃ。それは資本家のすることと一緒じゃないか。わしはスターリンの真似も資本家の真似もするまいと思うた。戦後昭和二十三年になって復員できたが、財界の人で戦争行ったの、あまりおらんようやな。重要産業いうて、鉄なんか兵役免除やもんな。財界で成功した人は兵役免除の人たちじゃ。わしらのように落ちたスズメ食うたり、ゴボウで命つないだりした者で事業やりよる者に会うたことがない」

坪内の述懐である。彼が一人の妻を守り通してきたことと、その反骨精神の由来が、この伊予弁から感じ取れる。

復員してみたら、彼は日本中が娯楽に飢えていると知った。その感覚は劇場経営の家に育ったことから来ているのだろう。

そこで彼は松山市内に映画館を持とうとした。映画館を建てるには建設省の許可が必要だった。その時の市議会議長にはある映画館経営者が就任していた。

当時の混乱した世相を表す戯画的なことだが、その議長が議会休会になると、議場にスクリーンを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com